

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



# ネサガ

淫邪に導かれし者たち

小説 栗栖テイナ  
挿絵 ねみぎつかさ

序章	元始の「闇」	006
第一章	魔海の聖剣	020
第二章	乙女達の死闘	080
第三章	闇の真実	130
第四章	受け継がれし伝説	186
終章	暗黒の千年紀	234

## 登場人物紹介

Characters



### ネイト

伝説の勇者アトゥスの末裔。その血統に相応しい真っ直ぐな性格の少女。志半ばに倒れた父の意思を継ぎ冥王討伐に挑む。

### アイナ

ネイトの幼馴染み。物心付いた頃から魔道に魅せられ、その才能を伸ばしてきた自称『大魔道士』。

### レナ

アイナの妹。己の身体を武器として戦う武道家。優秀な魔道士である姉へのコンプレックスから武道に傾倒している。

### メリッサ

教会で修行を積んでいた僧侶見習い。おっとりとした、あまり緊張感のない緩い性格でパーティのムードメイカー。

### ミネルバ

はるか南方の国から流れてきた踊り子にして、ソードダンサーの異名を取る超一流の剣士。

### ディオオーネ

世界の果て、深い森の中にあるとされる精霊の王国の王女。多くの精霊を呼び出して戦う召喚士。

「あんたらみたいなの、むさくるしい魔物には勿体ないけど……冥土の土産に見せてあげるわ、アタシの取っておきの——ダンスをね！」

力強い叫びと共に、剥き出しになった小麦色の両足が、力強いステップを踏み始める。鋭いスタッカートを多用した、情熱的なタンゴのリズム。ヒールが大地に食い込む度、辺りに舞い散る砂埃を払うような軽やかさで、引き抜かれた細剣が連続で振り下ろされた。

「グゴオオオッ！」「ギャオオオッ！」

ふわりと舞う腰布や赤髪と共に、ミネルバの周りに飛び散る毒々しい血飛沫。跳ねる四拍子のステップでその中を駆け抜け、熱く舞い続ける踊り子。まるで網目の如く無数重なる剣の軌跡。取り囲むデーモン達は、断末魔の悲鳴と共に次々と血の海に倒れ伏す。

『血煙の舞姫』と称される、超一流の踊<sup>ソールドダンサー</sup>剣士。その名に相応しい、美しくも恐ろしい戦いぶり。彼女の周りには、あつと言う間に魔物の死体が山となって積み重なっていった。

「ミネルバさん、そっちはお任せします！ デイオーネさん、私達で後ろの敵を！」  
「かしこまりました、ネイト様！ ヘルメス……お願い、また、あなたの力を貸して」

祈りを捧げるように、その白魚の如き指を絡ませて叫ぶ金色髪の精霊姫。先ほど、ネイトとミネルバの間に割って入ったユニコーン——ヘルメスが、その言葉に応えるように、<sup>いなな</sup>嘶き、一本の矢の如き勢いで駆ける。

輝く額の角。そこへ火の粉に包まれた無数の光が集まる。呼びかけに応じて現れた、炎の妖精達。燃え盛る紅蓮の炎で覆われた鋭い角が、殺到するデーモン達を紙の如く容易く

貫き、燃やし尽くしていく。

「みんな……ごめんなさい。もう少し……世界が、冥王の手から救われるまで……」

祈り続けるディオネの口から、悲しげな呟きが漏れる。心優しき精霊達を戦いの場へ駆り出すのは、精霊達の頂点に立つ王女の彼女としても不本意なこと。だが、今は世界を救うという使命の為、それに耐えなければいけない。憂いを帯びた表情に、そんな硬い決意がはつきりと浮かんで見えた。

敵の群れへと駆けるネイトもまた、薄紅色の唇をわずかに動かし、同じことを繰り返して呟いていた。

「そうよ……もうすぐ……あと、一息だから……」

——冥王アヌビス。およそ二十年前突如甦り、少しずつ世界を侵食している魔物達の首領。巨大な力と統率力の前に、各国の騎士団も赤兎扱い。世界は、今、目の前で繰り広げられているような惨劇が日常茶飯事な、混沌状態に陥りかけている。

絶望に飲み込まれつつある人々に残された、最後の希望。それこそが、かつて冥王を葬り去った伝説の勇者アトウスの血を引く次世代の勇者——ネイト。

「絶対に、冥王を倒してみせる……みんなと一緒に、必ず冥王をこの手で……っ！」

青い疾風となって戦場を駆ける勇者は、デーモンの群れを次々に切り倒しながら呟く。

幼い頃、同じく勇者として単身旅立ち、その志半ばで戦いに散った父。その志を継いで旅立ってから、早一年。襲いかかる様々な困難に負けず今日までこれたのは、頼れる仲間

達が、未熟な自分を支えてくれたからだ。

「ほら、レナ！ ぼんやりしていると、あんたも魔物と一緒に丸焦げよ!!」

「ちょ、ちよつと！ 大魔道士とか偉そうに言うくらいなら、狙いくらいちゃんとなつけないよ！ ほら、メリッサも笑ってないで、癒やしの魔法かけてよね！」

「はいはい。レナりんにも、ちゃーんとわたしの愛情たっぷり魔法をかけてあげるか、ちよつとだけ我慢しててね〜」

「ああ、もう!! メリッサまで馬鹿なことを言わないの！ まったく、みんな緊張感なさ過ぎなのよ！」

「あははっ、どんなときでも暗くならず、賑やかなのはいいことさ。さあ、それじゃあたしも負けずに、もつともつとド派手にいかせてもらうかねえ！」

「皆さん、油断してはいけません！ 最後まで気を抜かないで戦わないと……」

賑やかに語りあいながらも、それぞれが自分のなすべき役割を果たし、敵を打ち倒していく乙女達。獐猛なデーモンの群れは、彼女達にまともな手傷すら与えることもできず、次々と土に還っていった。

大魔道士アイナ。武闘家レナ。僧侶メリッサ。踊剣士ミネルバ。精霊姫せいれいきディオオーネ。

魔法、武闘術、剣術、精霊召喚術。それぞれの道を極めた頼もしい仲間達。彼女達と共にならば、冥王を倒して世界を救う——その重い使命を成し遂げることができると、確信を持てた。

「それにしても……こんな山奥に、デーモンの群れが出るなんて……本当に、もうあまり余裕はないわね」

目につく最後の一匹の首を叩き落としたネイトは、軽く剣を振って血糊を払い、小さくため息をついた。

「……光の三宝具。早く集めないと……」

自らの先祖である、伝説の勇者アトウス。彼が闇の王を封印する時に使ったとされている剣、鎧、そして宝玉。闇を封じる光の力を持つ三宝具は、冥王アヌビスを打ち倒す為に必要不可欠なもの。

長い旅の中、それらの隠されているらしい場所の目処が分かったが、この魔物達の活発な動きを考えると、一つ一つ悠長に回っている余裕はなさそうだ。

(……いっそ、三つ同時に回れば……それよ!!)

ふと脳裏に浮かんだアイデア。信頼できる五人の仲間達。彼女達の实力があれば、きっと……。

「みんな、ちょっと聞いてちょうだい！ 相談したいことがあるの！」

青髪の勇者は、早速そのアイデアを相談する為、戦いを終えた仲間達の下へと駆け寄っていった――。

(甘かった……私のミスだわ。全部……)

「おおっ……」「ショーツに染みができてるぜ……」

男達の野太い興奮の声。呼吸をする度に鼻腔を刺激する、饅えた男達の体臭。吐き気と羞恥を嘔み締めながら、勇者は自らの判断ミスを改めて悔いていた。

三つの光の宝具を一気に集める為、二人ずつ三手に分ける。そう決めたのは、パーティーのリーダーである自身だったからだ。

レナとメリッサは、伝説の鎧『ヴァルハラメール』が眠るといわれる辺境の洞窟へ。ミネルバとディオーネは、封印の宝玉『月の御魂』が封印されている霧の森へ。そしてネイトとアイナは、聖剣『グラットソード』が眠る、このシュバルツ海の死の海域へ。

二週間ほど前、あの山奥の村で相談した後、それぞれの目的地へ向かってバラバラに旅立った仲間達の姿が脳裏を過る。

(……私の油断よ。全部……)

卓越した力を持つ仲間達。三組に分かれても、魔物達に引けを取ることはない、心のどこかで油断していた。ようやくたどり着いた目的地で二人を待ち構えていた、醜悪な合成獣。挑発に乗って一人突っ込んでいくアイナを本気で止めなかったのも、彼女が敗れるとは夢にも思っていなかったから。

「はあふっ、あぐうっ……んんっ、やあ……ああっ、この……へ、変態ッ！ どこお……ひゃうんっ！ ん、んぐうっ!? おぶうっ、じゆるうっ、んんっ！」

悔しさに瞳を閉じた直後。頭上から聞こえた親友の声。宙に捕らわれたポニーテールの

大魔道士は、先ほどよりも更に激しい辱めを受けている。

股布の突く触手足が一本増し、食い込むショートツから露出したアナルまで、執拗に弄られる。無数の線が集まったような小さな肉穴。触手はそこへ染み出る粘液を塗し、皺の一本一本を解すように動いていた。

「はぐうっ、んごおっ、はあっ、おえ……おおっ！」

抵抗の声を上げようとする小さな唇も、別の一本の触手で埋められてしまう。唇の端が裂けてしまいそうなくらい、乱暴にねじ込まれた剛直。触手肌に張りつく唇から、苦しげな呻き声だけが漏れていた。

「見る。お前の親友は、もうこんなに蕩けているぞ？」

グチユリユウツ、又チユウツ！

あざ笑う声と共に響く、盛大な水音。股布を貫いて膣口を抉る触手の先が、ドリルの如く回転する。捲れた淫唇が大きく震え、透明の飛沫が辺りに散った。

「すげえ、あんなに濡れて……」「たまんねえ匂いだ」

「なっ……や、やめて！ お願いだからアイナは見ないであげて!!」

見上げる船員達は、自分達の顔にも飛び散ってくるアイナの雌汁に、興奮の声を上擦らせている。中には舌を伸ばし、散ってくる飛沫を食欲に味わおうとする不届き者までいる始末。込み上げてくる耐え難い激情を視線に込め、頭上の魔物を睨みつける。

「くっ……あなた、どういうつもりなの!? 私が言うことを聞けば、アイナには何もしな

「いって約束だったでしょう！」

「ああ。だから、処女は奪わずに我慢してやっている。折角の愉快な玩具だ。これをまったく弄らずにおけというのなら……自分でもらうだけでは物足りないな」

厳しい眼差しで見上げる女勇者に、エルダはその卑劣な行為に相応しい邪悪な笑みを浮かべて答える。

「物足りない……？ これ以上、私に何をしろと？」

「もっと愉快で淫らな余興だよ、勇者殿。そうだな……折角だ、そのクズ共に、もう少し手伝ってもらおうとしよう」

唇を歪めて呟くや否や、エルダは空いていた触手の一本は、宙で大きく振り回した。

「うおっ！」「な、何だ……」「があっ！」

飛び散る、くすんだ色の臭粘液。それが雨の如く、立ち竦む船員達に狙いを定め、降り注いでいく。

「皆さん!? くっ……こいつ!!」

身悶える船員達。彼らにまで手出しをするなら、もう黙っていられない。一か八か斬りかかるうと、悲痛な覚悟でタイミングを計っていた——その刹那。

「へへっ……ネイト様よお……」

「お、俺達……もう……」

酒に酔ったような、船員達の浮ついた声。何かと周囲を見渡した透き通る瞳が、次の

瞬間凍りつく。

「なっ……」

取り囲む男達が、まるで息を合わせたように、一斉にズボンを引き下ろしていたのだ。あらわになった股間、ピンと鉄棒の如くそそり立つ、赤黒い肉棒。

「へへ……勇者様のいやらしいオナニーを見せつけられてよお、俺たちや、もうこんなにギンギンになっちまったんだぜ？」

先ほどまでは多少の躊躇いを見せていた船員達が、一人残らず欲望を剥き出しにした顔で、戸惑う勇者を取り囲む。いきり立つ怒張、その先端が肌に触れてしまいそうな超至近距離。初めて目の当たりにする男のモノへの羞恥で頬を染めながら、ネイトは慌てて頭上でほくそ笑む怨敵を睨みつけた。

「あなた、一体、皆さんに何をしたの！」

「別に。ただ、俺様の触手から染み出る粘液は、浴びたものの理性を、ほんの少し緩める効果があるようだ。そう……例えるなら、極上のアルコールのようにな」

「り、理性を……緩める？ ……きゃあっ!？」

マントを翻し、いつでも飛びかかれる体勢でエルダを睨みつけた直後。硬い鎧に覆われた肩が、突如左右から強く押さえつけられた。

「ほら……そこに座れ！」「ああ、いい匂いだあ」

「ま、待って……どうしようって……やめっ……」

肩だけでなく、長手袋に包まれたほっそりとした腕やお腹の辺りまで。上半身のあちらこちらが、左右から伸びてきた男達の手で弄られてしまう。

「落ちていてください！ くっ、や、やめてください!! こんなことをしていたら、あいつの思う壺に……」

身じろぎしながら必死に訴える勇者の言葉も、熱に冒されたようにうっとりとした顔をする男達には届かない。力任せに振り払って怪我をさせるわけにもいかず、ネイトの額に焦りの汗が浮かんだ。

「無粋な抵抗などするな、勇者よ。そのクズ共の望むまま、喜ばせてやるがいい。そうすれば、お前の大切な親友を捕らえた足を、これ以上動かさしめない」

「喜ばせる……？ 一体、どういうこと……」

「知らねえなら、俺が教えてやるぜ、勇者様！ いいから、さっさとここに座れやつ！」

「ふえっ……きやうっ！」

呆然とエルダを見上げていたネイトは、両肩に思いきり体重をかけられ、その場にひざまずいてしまう。

「くっ……み、みなさん……うっ……おえっ……」

立ち上がるうとした途端、むわあつと顔を包み込んだ、尋常ではない臭気。三百六十度取り囲む、垢がこびりついた怒張。入浴など当然できない船旅。船室に充滿し、旅の最中アイナ共々辟易としていた男達の体臭。それを何十倍にも濃縮した醜悪な臭いが、鈴の如

く割れた先端から漂ってきていた。

「おえっ……いや、こ、この臭い……ううっ……」

染みる臭いのせいで、瞳に大粒の涙が浮かぶ。咽喉の奥から込み上げる、吐き気呼び起こす酸っぱい唾液。それを吐き出そうと唇を綻ばせた——刹那。

「へへっ、そのまま口を開けとけよ！」

——ヌチュツ……ズブウツ！

「おごおっ!? んうっ、んぐうっ、あぐあっ！」

突如ねじ込まれた、焼けた鉄棒の如き感触。周囲から漂う雄臭さを何十倍にも濃縮した腐臭。そして舌が麻痺しそうな塩味が、口内いっぱい広がっていった。

「ふあうっ、う、うしよ……ンンッ！ おひんひんうっ……くひい……ひやあっ!?!」

呆然と見開いた目に飛び込んだのは、自らの口を貫く垢塗れの怒張。薄汚い排泄器官を口にねじ込まれている。どんな窮地に陥っても冷静さを失うことのない勇者の思考回路が、完全に凍りつく。

「ず、ずるいぞ！」「俺もだ！ ほら、握れ！」

興奮に上擦る声と共に、刺激臭の漂う肉棒が次々と顔に押しつけられる。既に一本の怒張で限界まで広げられている唇の端へ強引に入ろうとしてくるもの。健康的な白い頬を杭のように突くもの。海風に揺れる水色の長髪にまで左右から何本もの生臭い男根が押しつけられ、右の耳元を飾る羽飾りがずれてしまう。

「みなひやあつ……おひいつ、んごおつ、ああつ！」

「はははははつ!! いい姿だな、勇者殿。どうだ? 自分が命を賭けて守ろうとしていたクス共のチンポの味は……さぞかし美味かろう!」

愉快そうに笑う、合成獣。睨みつけようと見上げた視線も、殺到する赤黒い棒の群れに妨げられる。押しつけられる肉棒達で顔が固定され、首を左右に振ることも許されない有様。鼻にツンと来る刺激臭に、瞳に涙が滲み出てきてしまう。

「ちつ、この胸当てが邪魔くせえ。ほら、可愛いおっぱいも弄らせてくれや、勇者様!」

欲望に火がついた男達の動きは、尚も激しさを増すばかり。硬い胸当てに覆われた肩口。そのわずかな隙間を狙って無数の手が忍び込んできた。

「んぎいつ! やあつ、んじゆるるうつ、んんつ!」

呼吸に合わせて激しく上下する、程よく膨らんだ双乳。他人に触れさせたことのない乳脂肪が、服越しに荒々しくまさぐられてしまう。

「ひいぐつ、はうんうつ、胸はあつ……やめて! お願いですから……しよ、正気に……んはああつ!」

まるで胸当ての中に毛虫を投げ込まれたような、身も毛もよだつ不快感。激しく動くゴツゴツとした手の平が、胸の中央で震える乳首粒を弾く度、全身がビクリと硬直してしまうのを堪えられない。

興奮に声を荒げる男達の動きは、更に激しさを増すばかり。捲れたスカートから露出す



## 第四章 受け継がれし伝説

「ひグうっ!? さ、裂けりゆっ、ああ……これえっ、食い込んで……んうっ、あふうっ、あああああっ! いぐっ、いいっ、あああああっ!」

冷たい石造りの密室に響く、踊剣士の擦れた悲鳴。

わずかに綻ぶ蜜裂。その中央を真つ二つに切り裂くように食い込む、鋭角。罪人の拷問に使われる、木製の三角木馬。後ろ手に荒縄で縛られたミネルバは、抵抗することもできず、そこへ乗せられていた。

「さあ、そろそろ吐いたらどうだ! 勇者ネイトの仲間であるお前が、どうして魔物達を率いていたんだ!」

「あははっ……さあ、一体何のことかねえ……アタシにはよくわからないっ……んう、あぎいつ、ああっ、あひいつ!」

傍らに立つ、鎖帷子を身に纏った取調官へ言い返した直後、両足が付け根から引っこ抜かれてしまいそうな重さが、踊剣士の肢体を下へ引つ張った。

刃のように鋭い三角の頂点が、恥丘から子宮辺りの深さまで、小陰唇を押し広げながら食い込む。目の前にパチパチと火花が飛び散るほどの、悪寒すら感じる激痛。乱れた赤髪から覗く額に、大粒の冷や汗が滲む。

正座のように折りたたまれ、荒縄で結ばれた膝。そこから伸びた縄の先に取りつけられた鉛の重石を、更に増やされたのだ。少しでも体勢を楽にしようと身じろぎするが、手足を完全に拘束されていてどうにもならない。木馬の頂点を隠すように、ふわりとかかった腰布が、ただ力なく左右に揺れるのが精一杯だった。

「おらっ、まだ責められたりしないのか!? この……メスブタがよおっ!」  
「だから、何のことかわからあ……おごおんっ!」

挑発的に言い返した台詞を押し込むように、熱い肉竿が口内へ突き込まれた。太い血管が葉脈の如く浮かび上がった竿肌が唇を捲って、異物を押し出そうと反射的に動いた舌を擦りつける。口いっばいに広がっていく、味覚が痺れそうな塩気と饅えた臭い。

ロクに汗も流せない最前線の砦。積もるほどに溜まった恥垢を、容赦なく塗りつけられているのだ。鼻の粘膜を腐敗させるような悪臭に、抑えきれない嘔吐反射が込み上げる。何度も嗚咽し、口内の汚物を吐き出そうと試みるが、焼けつくような剛直は踊剣士の抵抗をあざ笑うように、更に深くまでねじ込まれていった。

「んぎいっ、はうっ、んぐうっ、ごぼおっ!」

「覚悟しろ、白状するまで、いくらでも責めてやる!」

激しい怒声と共に、左右から更に数本の肉棒が、頬や首筋、二の腕辺りに殺到する。激しい責め苦に冷や汗の滲んだ肌に、汚泥のようにドロリとしたカウパー腺液の滲む鈴口が押しつけられると、背筋を走る悪寒がひと際強くなっていく。

少しでも逃れようと身じろぎをしようと、手足を縛る縄がミチイと軋む音を立て、更に食い込んだ。粗い縄目と擦れ、縛り目にうつすらと血が滲み、ヒリつくような痛みが強くなる。思わず背筋を海老状に仰け反らせて天井を仰ぎ見ると、木馬の鋭角が割れ目の幅を切り広げるような強さで、グチュリと前後に擦れた。

「んぐっ、おおっ……ひいつ、んっ……げほげほっ」

「これが天下に名を轟かせた踊剣士とは、聞いて呆れるな！ 結局は魔に降り……その挙句に、こうして男の慰めモノとは」

「何が偉大な勇者一行だ！ おら、しっかりとしゃぶれ、メスブタが」

口を犯し、肌擦りつけ……それぞれのやり方で自らの欲情を押しつけてくる騎士達が、赤髪の踊り子の心をへし折ろうと、口々に罵声を浴びせかけてくる。だが、それでもミネルバの紅色の唇には、相手を挑発するような薄ら笑いが消えずに浮かんでいた。

「あ、あんた達こそ、騎士様にしては少々品がなさ過ぎやしないかねえ？ この垢塗れの粗末なモノはなんだい？ これなら、魔物達の方がよっぽど清潔さ」

必死に上体をそらし、どうにか肉棒を吐き出した直後。荒く息を切らしながら、挑発するような眼差しで男達を睨みつけながら返す。冥王の支配地域と王国との防衛線を守る、もつとも辺境の砦。激戦地故、ここに集められるのは品性よりも何よりも、たくましく恐れを知らぬ者達ばかり。魔物達よりもタチが悪い荒くれ者の集団、一部で噂されていた通りの品のなさだ。

「アタシに舐めさせたいなら、せめて水浴びでもしてきたらどうだい？」

激昂する男達へ、蜜裂が引き裂かれる激痛に顔を歪めながら、挑発的な声を投げつける。長い間、女の身で一人旅を続けてきた、孤高の踊剣士。その誇りは、この程度の陵辱で潰されたりはしない。だが……今、ミネルバの心を支配しているのは、また別の感情。

（ふふっ、こういう単細胞には、これくらいの安っぽい挑発で十分よねえ。ほら、もっと怒り狂いなさいよ。そうすれば……）

「もっと……酷いこと……してくれるでしょ」

「俺達の意地にかけても、絶対に吐かせてやる！」

自分にか聞こえない、か細い声で呟いた刹那。両側に立っていた男達に、乱れた髪がケープのように覆い隠していた褐色の肩を強く押された。

ミチイツ、ギチユリユウツ、ヌチユウツ！

「ひがあっ!? おおっ、んぎいあああっ!! あぐう、ああっ、ひいつ、ま、股……んうっ、あそこお！ あぐうっ、んんっ、ひぐっ、ああっ、あふうっ！」

肉を裂く音を響かせながら、木馬の頂点が深々と肉の割れ目へ沈んでいく。染み出る愛蜜に湿った木肌が、痙攣する小陰唇を乱暴に押し広げる。硬い木と紐状のショートツが、膣口を捲るようにして食い込む。肉裂の頂点に、針を突き刺されたような強烈な刺激が断続的に走る。木馬の鋭角が、包皮に隠れた雌核にまで食い込んできている証拠。凍えたように全身が震える。下へずれた胸布から零れ落ちた豊乳が、浮かぶ汗の雫を振りまきながら、

悩ましく揺れた。

「へへっ、こうなったら最後まで喋らなくてもいいぜ！俺達が満足するまで、徹底的に翳ってやるからよ!!」

乱暴な言葉と共に、両足に結ばれた重みが一気に増した。肩を押さえていた男達が、それを足で踏みにじり、自分達の体重をかけてきたのだ。結ばれた縄が千切れそうなくらい鈍い音を立てて締めまり、雌裂を埋める鋭角が小陰唇の皺を伸ばしきるくらい、深くまで侵入した。真っ直ぐに引き裂かれ、そのまま菊穴と繋がってしまうのではないかと思うほどの深さ。蜜裂も雌核も、女として大切な部分が、すべて真っ二つに切り裂かれる。そんな不安が胸を過った刹那。

「ほら、身体を洗ってやるぞ、俺達の臭いのでな！」

ドブリユッ、ビュルルウッ、ビュビュブウッ!!

「ひやうっ、あふあああつ！ひいっ、ンごあつ!!」

取り囲む男達が自らの肉竿を抜き、生臭い迸りを一斉に放ち始めた。苦悶の汗に塗れた踊剣士の全身に、耐え難い臭気を放つ雄液が降り注ぐ。

「熱うっ……ドロドロにい、服も……髪までえ!!」

妖艶な踊り子の服が、振り乱された赤髪が、すべて粘度のある雄液に濡れ汚される。ところどころにゼリー状の固体すらあるそれは、辺境に押し込まれた男達の欲求不満すべてが濃縮されているようなおぞましき。扇情的に揺れる乳肌を伝って垂れていくと、微妙な



カチャリと手足の甲冑が音を鳴らし、わずかな胸布に包まれた乳房が、その重さを見るものに伝えるように、上下へタブンと揺れる。衝撃で布地が大きく下へずれ下がり、雪のように白い乳肌がほとんどすべて露出してしまふほど。縦に軌跡を描く乳首、それと同じ色をした薄桃色の蜜裂が、先ほどまで存分に踏みにじっていた男の分身を、食らうように啜え込んでいく。

「はあ……なかなか大きいっ、ひうっ、んっ、私の足がそんなに気持ち良かったの？ 破裂しそうなくらい硬くなっているじゃない」

汚れを知らぬ頃から変わらぬ、指を入れるのもきついくらいの狭い腔壺。表面の肉皺を竿肌へ食い込ませるくらいに締めてやると、騎士団長は声にならない呻きを漏らし、ガクガクと全身を痙攣させ始めた。

絶望と快楽に歪むその顔をじつと見下ろしながら、摩擦をじっくり楽しむよう、ゆつくりしゃがみ込む。表面を削ぎならされるような、強い刺激。皺が無理矢理引き伸ばされる度に、目の前が白く染まるような疼痛が背筋を駆け上る。

「ふふっ、でも……これくらいでは、まだまだ足りない……あなた達もいらっしやい！ 私の身体を隅々まで弄んで、この疼きを満たすのよ!!」

大きく背筋を仰け反らせながら、右手を高々と掲げて叫ぶ。今しがた握り締めていた肉竿のカウパー腺液で濡れた手袋が、小さな蠟燭の灯りで妖しく輝く。

「ハイ……偉大ナル冥府ノ主ヨ！」

片言の呟きと共に背後に広がる闇から姿を見せたのは、屈強なデーモン達。主の求めに応えるように、股間に剛直は垂直に近いほどそそり立っていた。

漂ってくる、むせ返るような腐臭。人のそれよりもはるかにおぞましい、魔物の白濁の臭い。以前ならば、臭いだけで嘔吐していただろうそれが……今は、興奮を煽る媚薬に思えてしまう。

「さあ、早く……ここも……口も、手も！ 髪でも胸でも太股でも……どこでもいいわよ。少しでも長生きしたければ、私を犯しつくして……悦ばせなさい！」

——ズチュウツ、ブブブウツ、ズブリユウツ！

「ンギイッ！ あぐうんっ！ おひりいやああっ！」

狂気を含んだ声と共に、肉を掻き分ける鈍い音が響き渡る。わずかに身体を前に倒し、後ろに向けて突き出したヒップ。小さ過ぎる布地からほとんど零れ落ちていた桃の如く尻肌の間へ、デーモンのたくましい剛直がねじ入れられたのだ。

入口の皺を直腸へ押し込むような強さで侵入してくる、焼いた鉄のような肉棒。腔道へ既に男を迎え入れているせいで、普段より更に狭い尻壺。敷居の壁を引き裂くような荒々しさで、焼けた怒張が充填された。

「んぐっ、あはあっ、はあっ、いいわ……んっ、人と魔物の雄の臭い……両方同時に……んっ、なかなか贅沢なものね。ふふっ、はあ……んちゅっ、んぐっ！」

込み上げる快感に息を切らしながら、左手で傍に突き出された魔物の剛直を掴み、自ら

積極的に口へ迎えていく。漂っていた腐臭が口から鼻いっぱい広がり、ツンと染みる感覚に瞳が潤んでしまうほど。下に感じる、塩気の強い透明液の味わい。下品な水音を鳴らしながら夢中で舐め回していると、食道から胃の辺りまでがじわじわと熱く火照り始めた。辺りを強い光で照らされたように、全身の快感神経がくつきり浮かび上がる。じっとしているだけでも、二つの穴を隙間なく埋める男根の刺激に達してしまいそう。もつともつと強い刺激が欲しいと、胸の中で燃える欲情の勢いは増すばかり。右手で傍に棒立ちだった騎士の肉竿を掴み胸に押し当て、零れ落ちた乳首粒へも自ら刺激を加えていく。

「んぐウ！　じゅるっ！　さあ、もつと突いて！　力いっぱい穿って……かけて！　早く私を満たして！」

息も絶え絶えに叫びながら、跳ねるように素早く腰を振る。二穴を埋める剛直が、薄い隔壁越しにゴツゴツとぶつかりながら出入りする感触。子宮やS字結腸を突き、入口を捲るように引つかかる強い刺激に、長い青髪を振り乱しながら甘声を上げる。背中を毛先が撫でるわずかな刺激にも、むず痒い疼痛を感じてしまうほどの昂り。潤む瞳で下を見つめると、膣穴へ迎え入れた剛直の主は、苦しげな吐息と共に唇を震わせていた。変わり果てた自分の姿に、最早悲鳴を上げる気力すらも削がれてしまった様子。青ざめたその顔が、どんな言葉よりも男の絶望を伝えてくれる。

(こんなことで悦んで……なんておぞましいの)

愉悅に満ち溢れた心を、頭の片隅に響く声が大げさに嘆く。蕩ける快楽に燃える心の一

番奥……そこで鼓動する、漆黒の感覚。それこそが今、身体を支配している深淵の闇。――受け継がれし、冥王の魂。

（あの方は、この苦しみを数百年も味わって……）

自分が無我夢中で突き出した剣を、何の抵抗もなく受け止め、優しげな微笑と共に散っていく冥王。彼の身体から噴き出した霧に包まれ、その魂に身体を支配された時、すべての真実が明らかになった。

彼こそが……数百年前、自分と同じように冥王の魂に身体を奪われた人物。自らの祖先である……勇者アトウスだったということ。

冥王とは実体のない、闇の霧。次々に強い肉体を奪い、悠久の時を超えるおぞましい存在。自分が突き出した渾身の一撃も、所詮は憑依していた勇者アトウスの肉体を壊しただけで……冥王の魂そのものを打ち倒すことはできなかったのだ。

「くそっ……勇者ネイト……裏切り者！ 恥知らずな……淫らな娼婦め!! よくも皆の期待を裏切り、闇に堕ちるとは……無様なッ!!」

「それじゃあ、そんな私の足で踏み潰された拳句、嬉しそうにオマンコを突いているあなたは、一体何なの？ 本当に情けない……虫けらのような男」

悲痛に叫ぶ男へ、冷淡に返す。そのやり取りだけでも胸の奥の疼きが高まり、肉竿を啜える二つの穴が激しい痙攣に襲われる。人を嘲り傷つけ……それを何よりの悦楽として感じる闇の魂。人々を守り慈しむ勇者であった自分の肉体が、こんなにも邪悪な意志に支配

されてしまった。頭の片隅に辛うじて残っている理性にとつて、それは生きながら味わわされる何よりも狂おしい拷問。前の冥王であった勇者アトウスは、この苦しみをたった一人で数百年もの間、味わっていたのだ。だからこそ……最後の瞬間、あんなにも安らかな笑みを浮かべていたのだろう。ようやく長い苦しみから解き放たれる……その悦びに心を震わせて――。

「じゅるうつ、んぐう、ちゅつ、あふつ！ ひアう！」

次第に大きくなる自らの甘声が、そんな思考を妨げていく。悶え苦しむ騎士団長を弄ぶように腰をくねらせ、口や手で突き出された肉棒を存分に味わう。

背筋を絶え間なく駆け上る甘い痺れ。更なる興奮を求め、蕩ける瞳で周囲に立つ魔物や木人形と化した騎士達へ指示を飛ばし、自らの剛直を抜かせる。

肉を擦る小さな音と共にむせ返るくらい強くなる臭気。堕ちた鎧から覗く首筋やお腹。露出した肌の隅々まで染み込んでくるよう。毛穴や血管まで汚されていく感覚に、歓喜を表すように身をよじらせる。

「早く……んぐつ、この私の肌を白くう……ンちゅつ、ちゅつ、はふう……おええつ……んちゅうつ！ はあ……汚して……さあ、早くうつ！」

咽喉の奥を突かれるくらい、左手に握るデーモンの剛直を啜える。頭上のヘッドギアがずれ落ちるくらいに素早く首を振り動かし、しっかり閉じた唇で表面を濡らすカウパーを残らず舐め取る。

右手では、物言わぬ騎士の肉棒を握り潰すような強さで扱いていく。火照る竿肌から漂う臭いも増し、それだけ込み上げる悦びに頬が緩むのを抑えられない。

(こんなの……もう嫌!! どうして……感じて……)

わずかに残った理性まで、押し流されてしまいそうな暗い快感。このまま正気を失ってしまった方が楽なのかもしれない……そう思うが……。

(駄目……みんなを……残しては……)

部屋の上に浮かぶ、巨大な水晶。そこに代わる代わる映るのは、苦楽を共にしてきた仲間達の、変わり果てた淫らな姿。

あの誇り高いアイナが、真っ直ぐなレナが、優しいメリッサが、したたかなミネルバが、誰よりも清らかだったディオオーネが。目を背けたくなるような淫らさで快楽を貪り、虐殺を楽しんでいる。すべては自分の力が足りず、こうして闇に堕ちてしまったせいだ。

闇に支配された彼女達を残し、自分一人で楽になることなど許されない。

(みんなだけでも救わないと……だから……)

——本当にそうなの？ 本心では……楽しんでるんじゃない。このうっとりするくらい……甘い快楽を。

(違う……そんな……私は……ああ……)

抗う理性を弄ぶように、心の闇が囁きかける声。それを否定しきれない疼きは、支配された肉体のものか……それとも、その言葉が真実なのか。

「さあ、出して！ 早くっ、んんっ、じゅるうっ！」

そうしている間に、近づく絶頂を求め、腰の動きが早さを増していく。

下腹部にしっかりと力を込め、膣穴と尻穴の二本を敏感な粘膜壁全体で味わう。腸や子宮が引き摺り出されてしまいそうなくらいの、強い摩擦。膨れ上がる硬い肉棒で圧迫された隔壁は、今にも破れてしまいそうなくらい熱く痺れていた。

「ネイト殿！ 目を……さま……うぐっ、うおおっ！」

「グゴオオッ！」

——ドビュリユリユルウツ、ビュブブボオッ！

「——ひふああつ！ あぐうっ、くうんふああつ！」

低い振動と共に、肉穴の二本がほぼ同時に達した。魔物らしい力強さで、大腸の方にまで流れ込んでくる熱い白濁。長く悶え苦しませたおかげか、ドロリとゼリーのように濃い子宮に流れ込んでくる精液。それぞれに違う味わいに意識も吹き飛ぶ甘美感を噛み締めながら、握り締める剛直も強く抜く。

ビュルウツ！ ビュビュウツ、ブリユルウツ！

「あふうっ!! あ、熱うっ、んんっ！ あはあつ、ドロドロおっ、んっ、はふっ、ああつ、ひあああつ！ イイツ……きゅんんっ、はあつ、はぎゅううううっ！」

主の無言の求めに応えるように、立ち並ぶデーモンと自我を失った騎士達もまた、一斉に迸りを放ち始めた。長い青髪に飛び散り、毛先から垂れた雫が頬や鼻先を濡らす。零れ



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**